

## 【要旨】

本稿は、地域の魅力とは何か、また地域の魅力と特徴の関係を考察してその要因とは何かを分析する事を調査目的としている。地域の魅力を考える上で、単なる人口の増減ではなく、人がどの程度流入・流出したかという人口の社会増減が地域の魅力を示す指標になるのではないかという『足による投票』という観点に立って調査を行った。

モータリゼーションの進展等により市町村をまたいだ社会生活が進展する等通常の行政単位である市町村単位では地域の実態を必ずしも正確に把握できなくなっている。このため分析に際しては、より実態に沿った単位である通勤・通学圏として定義した都市圏を対象としている。

都市圏の特徴については、産業構造はどのようになっているか・誰にとって魅力ある都市圏なのか等の観点から考察している。特に、業種別の就業者構成比・都市機能集積の度合い・年齢別人口構成・年齢別人口移動率を算出して特徴を抽出し、都市圏人口規模毎に都市圏の特徴と人口社会増減率との関係を分析した。

考察は以下の通りである。

人口 100 万人以上の規模の都市圏では、サービス型産業への転換が進み都市機能を幅広くほぼフルセット型に充実させている都市圏で人口が社会増加している傾向にある。充実した都市機能に引かれて若い層が流入し、人が集まる事で新たなニーズが生じて更に都市機能が充実するという好循環が生じていると考えられる。この事から 100 万人以上の規模の都市圏は、産業構造のサービス化を図り都市機能を充実させる事で地域の魅力を高められるのではないかと考えられる。

100 万人未満の都市圏で社会増加している都市圏は、ベッドタウン型（中心都市が大都市のベッドタウンとなっている都市圏）、製造業型（製造業が集積している都市圏）、ダム型（中心都市が含まれる都道府県よりも人口の社会増加率が高い或いは社会減少率が低い）の3つの性格に大きく分けられる。

ベッドタウン型都市圏のうち人口規模が比較的大きい都市圏は、学術研究機能や教育サービス機能等が充実している都市圏で人口が社会増加している傾向にある。これは、大都市近隣に立地しているという好条件に加えて教育サービス機能等学ぶ機能を備える事で学生が流入し、人が集まる事で新たなニーズが生じて更に都市機能が充実して人を呼び込むという好循環が生じていると考えられる。この事から、学ぶ機能・住む機能を集積させて学生や生活者にとって魅力ある都市圏を形成するという方向性が考えられる。またベッドタウン型で人口規模が比較的小さい都市圏は、学園都市として特化している東広島都市圏の人口が社会増加している様に、何らかの特化・突出した機能を備える事でターゲットを明確にした形でそれぞれ魅力を形成するという方向性が考えられる。

製造業型の都市圏は、製造業の就業者減少率が全国水準以下にとどまりながら、運輸・通信業等の関連業種で就業者人口が全国水準以上に増加している都市圏が社会増加してい

る傾向にある。現在立地している企業の雇用吸引力によって働く場として成立している都市圏だと考えられる。一方で、人が集まる事で生じているはずのニーズに対応する都市機能の集積は十分でないので、今後はニーズに対応する都市機能を充実させて働く場としてだけでなく住む場としての魅力も備える必要があると考えられる。

ダム型の都市圏のうち、人口規模が50万以上100万人未満の都市圏では、都市機能が比較的幅広く都市機能が充実している都市圏が社会増加している傾向にある。これは、従来からの行政都市としての強みに加えて比較的幅広い都市機能を備える事で、地域の中心としての魅力を備えていると考えられる。10万人以上50万人未満のダム型の都市圏では、学園都市として特化しているつくば都市圏の様に社会増加している例がある。この規模のダム型の都市圏では、それぞれの都市圏の特徴・状況を踏まえた上で見合った魅力とは何かを考えて生き残りを図る必要がある。

【担当：中村 研二(地域企画部)、平島 法幸(地域企画部)】